「日韓」の泥沼はなぜ続く

黒田勝弘（くろだかつひろ）　産経新聞ソウル支局長

非難し怒り謝り、互いに嫌いになる日本と韓国。「歴史認識」問題の本質とは何なのか？

日韓が歴史認識問題でまたもめている。「日韓併合条約（一九一〇年）は合法だった」という村山発言に続いて、「植民地支配で日本はいいこともした」という江藤発言が韓国側を怒らせ、江藤隆美総務庁長官は大阪ＡＰＥＣを〝人質〟に取った韓国側の解任要求に屈し辞任を余儀なくされた。日韓の過去をめぐって、韓国側のいう「妄言」を吐いて血祭りに上げられた日本の大臣はこれで何人になるだろうか。

ことしは島村宜伸文相（辞任はせず）に次いで江藤総務庁長官が二人目だが、昨年も永野茂門法相と桜井新環境庁長官の首が飛んでいる。韓国側は日本側からの「妄言」は建国（一九四八年）以来、三十回以上といっている。韓国の逆鱗に触れての日本の政治家たちの〝死屍累々〟ぶりは確かに尋常ではない。

韓国側でも若干、あきれており、問題になることは分かっているはずなのになぜ繰り返されるのか理解に苦しむといって、日本の政治家には聞かれても答えないくらいの「知恵」がほしいと、わざわざアドバイスしてくれる声（十一月十一日付け朝鮮日報社説）さえある。

あるいは、討死にしても繰り返し繰り返し同じような発言をしては屍を重ねているわけだから、韓国側から見るとこれは日本側のものすごい執念と映る。ただ、執念にしてはすぐ発言を取り消したり、謝ったり、辞任したりするからこれもよく分からない。そこで韓国の知識人たちの間では、逆にむしろ日本側に最後まで頑張ってもらう方がすっきりするのだが、という皮肉な声も聞かれる。

確かに、日本側が「妄言」と「陳謝」を繰り返していたのでは、その本音は「妄言」の方なのか「陳謝」の方なのかよく分からない。ただ韓国世論の大勢は、日本は決して過去を謝罪したり反省したりしていない、そして間違いなく軍国主義に向かっているという過去イメージで日本を見ているため、本音は「妄言」の方だと信じている。

したがって韓国民が決して信じない反省や謝罪を日本側がいくらいっても、韓国側の考えが変わるわけはない。すべて一時しのぎの外交的あるいは儀礼上のレトリックになるしかない。もちろん、外交摩擦やケンカをとりあえず収める効果はあるから、そうしたレトリックも必要ではあるが。

本音で謝られたら困る韓国

過去をめぐる韓国人サイドの潜在的な心理的事情としては、日本に本音で謝られたり反省されたりすると落ち着かないということもある。なぜなら、自分たちが抱いている確固不動の日本観が揺らぐことになるからだ。韓国にとって日本は昔と変わらぬ悪者であって、かつ脅威と警戒の対象でなければならない。

日本の存在が依然として「元気の素」である韓国にとっては、そうであってこそ張り合いが生まれる。だから逆説的にいって、韓国は日本に対し「過去の清算」を要求しているが実は清算されて困るのは韓国の方という皮肉もありうるのだ。

韓国側がよくいう「未来志向のために正しい歴史（過去）認識を」も、結局は後者に力点があって決して未来志向ではない。文字通りの未来志向なら、不満であっても過去の歴史認識にはこだわらない、ということでなければならないはずだから。歴史認識をめぐる日本の政治家たちの死屍累々から明らかなように、これだけ日本を政治的、外交的に、そして効果的に揺さぶることのできる過去―歴史カードは、韓国としてもそう簡単には手放せない。

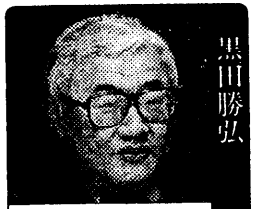
ところで今年の八月十五日、韓国では日本の植民地支配から解放された「光復五十周年」を記念する政府行事の目玉として、周知のように日本の朝鮮植民地支配のシンボルだった旧朝鮮総督府ビル（現・国立中央博物館）の解体・撤去が行われた。現場の光化門前広場では仮設式場が設けられ、大統領以下、各界要人が出席して盛大に式典が挙行された。

野外だから市民も自由参加となり、テレビ中継も行われ、いわば全国民が見守る中、総督府ビルの尖塔部分が解体、取り外された。大建造物であるため解体・撤去には時間がかかる。とりあえず「八・一五」に合わせ尖塔部分の取り外しだけを象徴的にやって、記念行事にした。

この記念行事では前後に各種のパレードや音楽演奏など、趣向をこらした出し物もあった。もちろんその多くは国旗の「太極旗」を手にかざした若者たちによる群舞をはじめ民族的色合いの強いものだったのだが、興味深いハプニングがあった。当日はほとんど誰も気がつかず、翌日、マスコミ報道などで知るに及んだ。

実はこの光化門前での八・一五記念行事の際、行事を盛り上げるために軍楽隊のブラスバンドが演奏をしていた曲の中に「感激時代」という題名の曲が入っていて、そのことが後で問題になったのである。

「感激時代」というのは韓国のナツメロではかなり名の知られた歌謡曲で、聞けばだ



黒田勝弘

一九四一年生まれ。京都大学卒業後、共同通信社に入社。韓国延世大学留学。ソウル支局長等を務め、八八年産経新聞社に移籍し現職に。ボーン上田国際記者賞を受賞。

いたいみんな分かる。交通放送が毎日やっているラジオのナツメロ長寿番組のテーマ曲でもあり、夜、バスやタクシーに乗っていると車内放送でよく耳にする（韓国ではバスやタクシーが車内でしょっちゅうラジオを流していて、時に不愉快になるが）。

歌謡曲にしてはたいそう明るく軽快で、マーチ風でもあり、ラジオ番組のテーマ音楽として格好である。歌詞も「歌え、歌え、青春の歌を……」といった感じで、日本の終戦直後の「青い山脈」をもっと元気よくした感じといおうか。だから八・一五記念行事の際のバンドにも使われたものとみえる。

ところがテレビ中継を見ながらこの曲を耳にした視聴者から、テレビ局や新聞社に抗議の電話が殺到した。この「感激時代」は日帝時代（＝日本帝国主義時代つまり植民地時代）に流行った「日帝の歌」だから、ああいう記念すべき神聖な行事に際して演奏するのはケシカランというのである。

もう少し詳しくいえば、「感激時代」は一九三九年、日本でいえば昭和十四年に韓国（当時でいえば朝鮮）で大ヒットした歌で、抗議者によると中国大陸に日本の軍事侵略が広がる中、抑圧下の韓国人たちの目を暗い現実からそらさせるため日帝が流行らせたのだというのだ。

「感激時代」は作詞・作曲も韓国人で、歌い手も当時の人気歌手・南仁樹（ナム・インス）で、どこから見ても韓国の歌である。ぼくだけでなくほとんどの韓国人たちもその題名、歌の調子などからてっきり一九四五年、日本支配から解放された直後、解放と新時代の喜びを歌った歌と思い込んでいた。

マスコミ各社に抗議が寄せられたのには背景がある。実は十五日の前日、これはぼくも見ていたのだが、あるテレビの「八・一五特集」で芸能界の対日協力をテーマにした「親日狩り」の特集番組が放送されていた。ぼくもこの番組で「感激時代」が解放後の歌ではなく、日本時代の歌であることを初めて知った。抗議はこの番組の早速の影響だった。

この一件は主催当局が事情を知らず申し訳ないと謝ってそのまま過ぎてしまったのだが、最近の日韓の歴史認識をめぐる摩擦とからめると面白い。

韓国側の主張にしたがえば「感激時代」のような明るく軽快な歌など暗黒の日帝支配時代にはあるはずがなく、しかもそれが韓国人の間で大ヒットしたなどということは想像力の範囲外ということになる。にもかかわらずそれが事実だったとすると、それは韓国人たちをだますための宣伝歌謡に過ぎず、一顧だに値しないもの、ということになる。

世代で違う「日帝支配」の評価

「感激時代」の時代的背景は、確かに日本のいわゆる大陸進出政策で、「満蒙開拓」などに日本人はもちろん韓国人たちも日本の国策に乗って続々と大陸へ出掛けていた時期である。したがって今からみれば大陸侵略を正当化する「日帝の宣伝歌謡」であることは間違いないが、それでも「感激時代」は解放直後の歌と勘違いしたほど明るく軽快だったのだ。そしてこの歌が大ヒットするほど流行ったという当時の韓国人の気分を想像してみるのは面白い。

まさかこれで、江藤長官のように「日本の植民地支配はいいこともした」とはいわないが、韓国人が解放後の喜びの歌と勘違いするような気分の歌を、日帝支配下の韓国人たちが気に入って大いに歌っていたという事実を、韓国人自身も既に想像できな

くなっているということを、今回の「八・一五エピソード」は物語っているのである。

現在の韓国人たちが日本による植民地支配をどう認識しているか、興味深い話がある。昨年十月、ソウルの漢江で聖水大橋が崩壊し大騒ぎになった時、知り合いの韓国人からこんな目撃談を聞いた。この事故は川にかかった橋の橋桁が中間部分でごそっと落ちたもので、交通量の多い朝のラッシュ時だったため大惨事になってしまい内外で大きな話題になった。

知人の話だと、事故のあった朝、対岸の岸辺で現場をながめていた野次馬たちの間でのできごとだ。野次馬たちは事故の原因などについて床屋談義風にあれこれ意見を開陳し合っていた。その中である年寄りが「うちの国はどうしてこうなんだ！」と慨嘆しながら「日本時代に建造された橋は五十年以上経ってもちゃんとしているのに、わずか十年ちょっとしかならない橋があれとは困ったもんだ」とつぶやいた。

ところが、この話をそばできいていた若者が「おじいさん、何をいうんです！　わが国がこんなに遅れてしまったのは日帝のせいではないですか。日帝の支配さえなければわが国はもっと発展していて、ちゃんとした橋をつくっていますよ。あの橋が落ちたのも日帝のせいですよ！」と反論したというのだ。

これに対し年寄りは「若いの、何をいうんだ！　お前は日帝時代を知らないのだ」といさめ、その後、いや違う、そうだ、などと言い合いになりつかみ合い寸前になったところで周りが「まあ、まあ、まあ」となだめて終わったという。

これはきわめて象徴的な風景で、示唆するところが多い。最近の日韓摩擦にひきつけていえば、年寄りはいわば「日帝はいいこともした」といっているのに対し、若者は韓国政府の公式立場と同じく「日帝は諸悪の根源」であって年寄りの発言を「妄言」として糾弾しているのである。

年寄りはおそらく、日本支配の植民地時代を生きた自らの歴史的体験を背景に実感として発言しているのに対し、若者は主に自ら受けた教育やマスコミなどから得た知識によって発言しているのだ。日本時代を知っている旧世代がかえって日本に甘い歴史認識をもっている反面、日本時代を知らない新世代の方が逆に日本との過去に対し厳しい認識をもっているという、近年の韓国社会でみられる対日観の特徴的な対立である。前者では「日帝」は具体的なイメージであるのに対し、後者では抽象的といっていい。

これは「日帝」にかかわる歴史認識で世代差が表われているエピソードだが、世代差ではなく「会話」と「活字」といういわば私的場面と公的場面での違い、あるいは韓国人同士の本音のつぶやきと日本人を前にした教訓的な場面の違いで、次のようなケースもある。韓国のある月刊誌に載っていたエッセイである。

文章からみると若者ではなく年輩者のようで、最近、韓国南部の多島海に旅行したおり日本人観光客に出会った話を書いていた。エッセイの筆者は多島海めぐりの遊覧船の中で隣合わせた日本人観光客とあれこれ会話を交わしたのだが、話が韓国の電気製品のことになって、日本人客が「韓国の製品もずいぶんいい製品が出ている」といったのに対し、韓国人筆者は次のように受け応えしたという。

「韓国の産業も今や大きく発展したけれどまだ日本にはおよばない。しかしそうなっているのにはあなた方、日本人にもその責任があるということを知らなければならな

い。あなた方は三十六年間の植民地統治を通じて韓国をきわめて後進国にしてしまい、われわれが六・二五動乱（朝鮮戦争）で苦労しているときあなた方は対岸の火事みたいに楽しみ、金をたくさんかせいだ。しかしわれわれもやがて住みやすい国になるだろう」――。

先の聖水大橋の若者とまったく同じ歴史観である。日本の植民地支配のせいで、本来、発展しているはずだった韓国（朝鮮）は後進国になってしまい、その結果、今なおいい製品も十分に作れないというのだ。若者でなくても相手が日本人だったら活字で文章にしたりすると、韓国政府と同じトーンになってしまう。

実はこれとまったく同じ話を、ぼくの事務所で働いている二十代後半の短大卒の女性からも聞いている。どうやらこれが現代韓国における共通した歴史認識のようなのである。これは日本人として知っていていい話だ。

とりあえずその当否はともかく、韓国では過去の日本支配の歴史についてそのような教育がなされ、国民の大多数がそう信じているのである。韓国政府が「植民地支配で日本はいいこともしたよ」という江藤発言に驚いて反発するのも同じ背景だ。これは建前ではなく、ひょっとして韓国民のほとんどが今や本音としてそう考えているのかもしれない。先の、若者からしかられた年寄りのつぶやきは、時間の経過とともに確実に少数派になりつつあるのだから。

こうした韓国人たちの歴史認識は教科書をみればよりはっきりする。

「福は内、鬼は外」史観

韓国の教科書はいわゆる国定で、政府が作った一種類しかない。歴史教科書の場合、中学校でも高等学校でも政府機関である「国史編纂委員会」編の「国史（上・下）」だけしかない。近現代史はいずれも下巻に出てくるが、記述は日本の侵略に先立って韓国自体にいかに活発な近代化の動きがあったか、また日本の侵略に対しいかに立派な抵抗が行われたかに終始している。日本は韓国の近代化をたすけたのではなく、その近代化の芽をつんで近代化を遅らせたというのだ。

手元にある一九九三年版の高校「国史（下）」でみると、近代史の部分の章立ては第二章「近代社会の発展」と第三章「民族の独立運動」であり、第二章では「近代意識の成長と民族運動の展開」が核心部分で「東学農民運動の展開／近代的改革の推進／独立協会の活動と大韓帝国／抗日義兵戦争の展開／愛国啓蒙運動の展開」からなっている。

また第三章では「独立意識の成長と三・一運動」「大韓民国臨時政府と独立戦争」が柱で「民族の受難／抗日独立運動の推進／三・一運動」「大韓民国臨時政府の活動／国内の独立戦争／国外の独立戦争」となっている。

つまり、教科書では自分たちがいかに日本にやられたかではなく、いかに立派に戦ったかという歴史が書かれている。いわゆる抵抗史観であり「よくやった史観」である。これをもうすこし詳しい記述でみると「単元概要」には次のように書かれている。

「近代国民国家の樹立を追求していたわが国は、二十世紀初め武力を前面にした日帝の侵略で国を強占された。これによってわが民族は日帝の憲兵、警察の弾圧で無数の民族指導者が逮捕、投獄され、民族の生存権まで侵害された。しかしわが民族はこのような民族的危機を打開するため各方面で多様に独立運動を展開した。すなわち武装

独立闘争、民族実力養成運動、外交活動など各種の方略をたて、たゆまず日帝に抵抗した。とくに三・一運動以降は大韓民国臨時政府を中心に独立運動がより体系化され、第二次世界大戦中には日本とドイツに宣戦布告し、韓国光復軍は連合軍と共に日本に抵抗し戦った。そして一九四五年、日帝の敗亡とともに光復を迎えた」――。

日本の進出（侵略？）が韓国の近代化を刺激したとか、日本支配が韓国に近代文化をもたらしたとか、江藤発言ではないが鉄道、港湾、学校などを日本がつくってくれたとか、そんなことはどこにも書いてない。しかも「よくやった史観」だから、たとえ押し付けだったにしろ日本による創氏改名や徴用・徴兵など日本支配に対する協力の実態も書かれていない。もちろん従軍慰安婦など恥ずかしい（？）歴史は紹介されていない。

その結果、韓国の歴史教科書では日本への協力が最も進んだ一九四〇年代が実質的には空白になっていて、突然、一九四五年八月十五日がやってくる感じなのだ。

韓国の歴史教科書を見ての印象は「われわれがなぜ日本に侵略されたのか」の記述が少ないことだ。その結果、日本との関係はすべて日本による「強制」で説明されている。たとえば日韓併合（一九一〇年）にいたる過程については前述の「民族の受難」の項に「国権の被奪」として出てくるが、わずか半ページちょっとの記述の中で「強制」「強要」といった言葉が六カ所も使われている。

時代は日露戦争（一九〇四―五年）のころだが、たとえば「戦略的に橋頭堡を確保しようとする日帝の強要によって韓日議定書（一九〇四年）が締結された」「第一次韓日協約が強制で締結された」「（日帝は日露戦争勝利の後）列強から韓国の独占的支配権を黙認され乙巳条約（一九〇四年）を強要してきた」「（その後）高宗皇帝が日帝の強制によって退位させられ、軍隊が強制で解散させられ、大韓帝国は防衛力までも失った。続いて言論、集会、出版の自由を蹂躙され、司法権と警察権も奪われたのみならず、ついには国権さえも強奪された（一九一〇年）」といった具合だ。

日帝の侵略にもかかわらずわれわれはよくがんばったという抵抗史観は、民族的な元気付けとして必要であろう。「強制性」の強調もわれわれは決して日本支配に協力したことはないし、日本支配を恩恵として受け入れたこともないという民族的な誇りや自負心から必要だろう。とくに教科書というものの性格からしてそうだろう。

ただ、人ごとながらこうした史観あるいは歴史認識だと、自分たちの不幸はすべて外から強制によってもたらされたということになりかねない。いわば「福は内、鬼は外」みたいなものだ。一見して抵抗史観を通じた自主性あふれる歴史認識に見えながら、悪いのはいつも他人（日本）という一種の「他律性史観」になっているような感じがする。

しかし、十九世紀から二十世紀にかけて近代化に後れをとり、かつ植民地支配というつらい歴史的経験をした韓国としては、そういう歴史観と歴史認識にならざるをえないのかもしれない。これはわかる。韓国人には韓国の歴史的経験からくる韓国人の立場があるからだ。

ただ、それでも日本は日本でまた、当時、ロシアなどとの問題があって別の歴史的経験をしており、この時期の考え方には韓国人とは違った日本人の立場がありうる。だから昨今、日韓間で問題になっている歴史認識のことは、韓国の主張はよく理解できるが、だからといってすべてにおい

て一致というのは難しいということではないだろうか。したがって「理解してほしい」はいいとして「こちらに一致しろ」はきつ過ぎる。まして外交問題としてそれを一致させようというのは無理というものだ。

「朝日」社説の奇妙な論理

最近、日本の朝日新聞の社説（十一月九日）に奇妙な文章が出ていた。「もし『ジャパン州』だったら」というタイトルで江藤総務庁長官の発言問題に触れ「頭の体操をしてみよう」として、日本が一九四五年の敗戦の後、米国に併合され「ジャパン州」になって韓国が日本にやられたようなことをされたとしたら日本人はどう考えるか、という話を書いている。

つまり日本だって韓国が日本にされたようなことを他国にされたら怒るだろう、米国に無理やり併合され、英語を強制され、星条旗に忠誠を誓わされ、米軍兵士にされ、名前もスミスやジョンソンになり、これに反対する反米独立運動家には血の弾圧が加えられれば、民主主義を教え経済・技術援助などしてくれたからといって後に「米国はいいこともした」と併合に感謝するだろうか、というのだ。

その言いたいことは「自国の民族感情に極めて敏感な日本の右派政治家たちは、なぜ隣国の民族感情にこうも鈍感なのだろうか」というまともなもので、かならずしも悪くない。しかし、日韓の植民地支配にかかわる歴史を一九四五年の敗戦後の日本とアメリカに状況を設定するというのは、どう考えてもおかしい。もし日韓の支配・被支配が一九四五年の日米関係で敷衍、比喩できるのなら、韓国人たちだって今のようにいつまでもぐずぐずいってはいないだろう。

この社説を知り合いの韓国人に読んでもらったのだが、その反応も「たいそうありがたい話だが、ちょっと違うのではないか」というものだった。

何が違うかというと、日韓の歴史をもし社説風に比喩をするとしたら一九四五年の日米ではなく十九世紀後半、いわゆる幕末のペリー艦隊来航に始まる日米関係をもってくるべきだと思うからだ。

ペリー艦隊で日本に開国を強制したアメリカがその後、日本を併合して植民地にし、たとえば日本人のチョンマゲを切って洋服を着せ、寺子屋を学校にして英語で教育することを始め、後は日本が韓国にしたようなことをしたとして、何十年かたって日本が独立した後、さて日本人はこの米国支配をどう考え、どう評価するかだ。

実はもともと日韓関係に米国を持ち出して考えること自体がナンセンスである。なぜなら韓国人たちは日本人、日本文化のルーツは韓国だといってるし、日本サイドでも植民地時代には「日鮮同祖論」といって、いまや死語だが原理的には同じことをいっていた。日米関係にこんなことなどありえないではないか。

しかし「朝日」の社説が米国を引き合いに出しているためこちらもあえて米国を登場させたのだが、それなら一九四五年ではなく幕末ではないかというわけだ。

日韓の歴史摩擦いや歴史認識摩擦というのは、日本の韓国支配が韓国のまさに幕末である朝鮮王朝（李朝）末期に当たり、韓国の近代化という問題と密接に関係していたことから起きているのである。だからもしペリー艦隊の時のことだとすると、後世、日本人たちは、思い出せば腹が立つが結果的にアメリカはいいこともしてくれたと思うかもしれない。そしてそれ以上に、やはりあの当時はこっちがどうしようもなかったのだから仕方なかったと思うかもしれない。

ただこれも実際は米国に併合されなかったわけだから、あまり現実味のある話ではない。そこで、実際にやられた経験をもつ韓国人は「やはり日本人は分かっていない」と怒るかもしれない。また米国ではなくロシアに置き換えると、別の感慨が出てくることも考えられる。

もう一つ、これは「朝日」の社説について韓国人の知り合いが強調していたことだが、一九四五年の日米はお互い大規模な近代戦を堂々と展開して勝者と敗者になったのであって、戦わずして支配された韓国とはまったく違うというのだ。しかも日本はその後、米国と経済戦争をやるまでに盛り返したではないかという。

つまり、日本は社説の言うようにたとえ米国に「ジャパン州」として併合、支配、抑圧されたとしても戦って敗れたのだから諦めがつくだろうし、そんなにストレスあるいはコンプレックスは残らないだろう。しかし韓国の場合は諦めがつかない。しかも現在、日韓の経済格差はまだ大きい。韓国流にいう、いわゆる〝恨（ハン）〟の気分が日本に対してなかなか抜けないというのだ。

前述のように韓国の歴史教科書がいわゆる日帝時代を抗日闘争など抵抗史観一本で描写しているのも、そうした〝恨〟の反映とみていい。韓国人たちもできれば「日本と戦争した」と考えたいのである。

あくまで特殊な日韓関係

日韓の歴史関係を考えるとき、アメリカなど持ち出してもあまり参考にならない。日韓はやはりそのものとして特殊な関係なのである。韓国でも最近、日本マスコミの影響だろうか、日本糾弾にドイツのことを引用することが流行っている。そのせいで、たとえば終戦直前に朝鮮人徴用労働者らを動員して建設が進められたという長野県の松代大本営跡を紹介する韓国のマスコミは、これを「日本のアウシュビッツ」などと表現したりする。

ナチスドイツはユダヤ人たちに対して、われわれはルーツは同じだといって「日鮮同祖論」みたいなイデオロギーを捻り出し、いわゆる同化政策をやったというのだろうか。日韓の関係はドイツを引用しても分からない。日本糾弾の運動として何でも利用するということでは分かるが、日韓関係の理解には何のたすけにもならない。

特殊だから韓国は日本にいつまでも謝罪と反省を要求し、日本もそれに付き合うのだ。

これは「謝罪と反省」でドイツがモデルとしてしきりに引用されるため、いわば売り言葉に買い言葉的にいうのだが、植民地支配ということでは、周知のように今年夏、オランダのベアトリクス女王が初めてインドネシアを公式訪問したが謝罪も反省もしていない。先年、フランスのミッテラン大統領もベトナム初訪問で同じく謝罪も反省もしなかった。エリザベス女王がインドや中国にいって「過去」を謝ったという話も聞かない。

外交問題として歴史認識の一致を求めるなどというのも、日韓ならではである。世の中を見回して相対的に考えればそんなに大騒ぎする必要のない問題でも、日韓だから大騒ぎになるのだ。

この原稿を書いているとき、中国の江沢民主席が韓国を初めて公式訪問した。金泳三大統領との首脳会談や共同記者会見では自分たちの「過去」はそっちのけで日本の「過去」、つまり日本の歴史認識批判に終始するという奇妙な光景となった。

韓中の「過去」というのは、朝鮮戦争

（一九五〇―五三年）の際の中国軍の介入である。あの時、北に攻め込まれた韓国は国連軍の支援で盛り返し、一時は部分的に中朝国境まで北の金日成軍を押し上げたのだが、ここで中国が百万の大軍で軍事介入したため再び南に押し戻され、戦争は長引いた。中国は朝鮮半島の内戦に軍事介入し、崩壊寸前の金日成政権を救った。別の言い方をすれば、金日成政権崩壊で韓国主導の南北統一も可能だったのを妨害したともいえる。

中国は国境が侵される危機感から防衛的観点で派兵、介入したとして今なお参戦を正当化している。したがって韓中国交正常化に際しても韓国側の期待にもかかわらずこの「過去」については謝罪も反省もしていない。今回の江沢民訪韓に際しても、双方はこの「過去」はまるでなかったかのように黙ったままだった。韓国世論も同じだ。

とすると韓国だってすべての国に歴史認識の一致を求めているわけではない。また「過去」が清算されなければその先、付き合えないというわけでもないのだ。

この件での中国に比べると、日本などは韓国との「過去」について既に何回も謝っている。ただ韓国側がそれではまだ足りないといっているに過ぎない。先のヨーロッパ諸国の旧植民地に対する対応も考えれば、日韓関係は特殊な関係であるが故に相対的にはむしろ日本は韓国の主張、要求によく耳を傾けているということもできるのだ。

もう一つ、最近、韓国マスコミで大きく報道された東京発の記事があった。滋賀県の蒲生郡日野町の「町勢要覧」に町の歴史が書かれていて、そこに地元の戦国武将・蒲生氏郷が豊臣秀吉時代に朝鮮出兵したことが「一五九二年　朝鮮征伐従軍」と書かれていたため、地元の在日韓国人団体が「征伐」とはケシカランと問題にしているというのだ。

またかという感じだが、日本でも戦後は「朝鮮征伐」という言葉は桃太郎の「鬼が島征伐」の「悪者退治」のようでまずいといって使われていない。「町勢要覧」は古い資料をそのまま引用したためとみられ、町当局も手直しを約束したという。ただそれだけの話がはるばる韓国まで伝えられ、韓国マスコミは早速、「また日本が歴史歪曲！」と飛び付いたのだ。

これも韓国では昔から「朝鮮侵略」とすべきといっている。しかしぼくは既に本誌一九九二年十月号で紹介しているが、先に引用した韓国の国定歴史教科書「国史」では十三世紀の元寇のことを高麗・元連合軍による「日本征伐」と数カ所にわたって書いている。つまりこんな古い話など、侵略した側は「征伐」といい、侵略された側は「侵略」というのだ。歴史認識は立場によって違うのである。

ところでこの滋賀県の蒲生郡の町の話も日本のマスコミでさも大きな問題であるかのように報道されたのが韓国に伝えられたものだ。最近、問題になった村山発言は日本の「赤旗」紙に始まり北朝鮮の「労働新聞」が糾弾報道して大きくなった。江藤発言はオフレコ懇談が日本の雑誌に載ったのが発端という。蒲生郡の町は、今や「朝鮮征伐」はまずいということで日本側の歴史認識は一致しているようだ。古いことだしそれはそれで構わない。しかし村山・江藤発言では一致していない。いずれもまず日本国内で日本人が問題提起しているのだ。となると、これは日韓問題という以前に日日問題である。

歴史認識は政治問題や外交問題として声高に言い合う対象ではないように思う。いろんな考え方が可能なのだから、文字通り相互理解のためお互い興奮せずに議論したいものだ。

新連載

嬉しい街かど

①

がに股の犬とラブホテル

文と写真
武田花（たけだはな）

×月×日　晴れ時々曇り後雨

一時に寝て、三時に目が覚めた。眠くてしょうがない。朝、六時前に出発。くも（猫）も乗せて行く。

東関東自動車道で、久しぶりに鹿島灘へ。鹿島工業地帯近くの海沿いには新しい道ができ、すっかりきれいになっていた。町おこしか。きれい過ぎる。このまま開発が進むと、殺風景な、でも気持ちのさばさばするような景色がなくなってしまうのではないか……よそ者の勝手な心配。堤防に波がぶちあたり、飛沫が道路に降りかかる。突っ走ってきたトラックがスリップして一回転。今日の海は荒れ気味らしい。

日川浜の広い砂浜。砕ける波をしばらく見ていたら、胸がせいせいした。柔らかな砂の上に、かっちんかっちんに堅くなった鳥の死骸。カモメだろうか。廃屋らしき小屋の床下から犬がひょっこり顔を出した。顔はシェパード、体はダックスフンドみたいな犬。シェパードとダックスフンドが結婚したのか？　それを見たくも、がたがた震えながらワニのように這いつくばって逃げようとする。自分の方が大きいのに。短い足で砂を蹴り、長く続く砂浜をがに股で走って行く変な犬。その先はるかに、工業地帯の赤白縞模様の煙突三本が、蜃気楼のようにぼんやり霞んで浮かんでい